

私と切手収集

経済評論家・政策アナリスト 池田 健三郎

小学生の頃はいわゆる「切手ブーム」の時代であった。学校ではクラス中が切手の話や交換で盛り上がり、「ドラえもん」に登場するスネオが「月に雁」や「見返り美人」といった憧れの切手を自慢するのを、子ども心に羨ましく感じたものだ。現在のような携帯ゲームもない時代、1枚の小さな紙片を調べて、地球の裏側の遠い国々のことを想像したり、満州国の傀儡政権が出した切手を眺めながら当時の大陸に思いを馳せたりした。時間・空間を超越した楽しみが広がり、子どもながらにささやかな「資産」を持った気分させてくれる切手は、まさに宝物であった。

やがてブームは泡のように消失し、テレビゲームなどにとって替わられていったが、何故か私は切手を止める気にはならなかった。新切手の購入は、濫発に嫌気がさして早々に断念したものの、細々と収集は続けていた。結局そのまま今日に至り、気付けば数少ない「ブームの生き残り」のひとりである。

近年、趣味の多様化でコレクション系趣味が見直されたことや、レトロブーム、女性による雑貨ブームなどの追い風もあって、切手集めにやや復権の兆しがみられるのは嬉しい。事実、ネットオークションを覗いてみると、昔憧れだった切手が安価でよく売れており、懐かしさから「つい大人買い」というリバイバル組も目立つ。

私自身は、長く続けているお陰で、スポーツでいう「国体」や「オリンピック」にあたる競技（展覧会）でメダルも獲得し、世界中に友人もできた。こうした内外のコンペの仕組みが確立しているのも切手の世界の特徴である。数年前から切手関係の展覧会審査員や財団役員も引き受けたほか、昨夏からは仲間たちとNPOを立ち上げ、より能動的に郵便や切手の文化活動をプロモーションすべく知恵を絞っている。このNPOでは、郵便物から使用済切手を切り抜いて回収する慈善運動の元締めもやっている。これは、ボランティア団体などが回収した古切手10kgにつき助成金5,000円を差し上げるという画期的なも

のだ。切手コレクターがこうした古切手回収運動の資金源になって支えているからこそ、これができる。

この間、「切手の鑑定」にも関わってきた。切手は小なりといえども「方寸の芸術」であり「紙の宝石」だ。モノによっては高値がつくだけに、手の込んだ偽物もある。切手の鑑定は、値段ではなく、切手としての真偽を複数人で判定し「意見を示す」業務をいう。未使用切手の場合は概ね、切手の紙・刷色・印刷形式・目打（周囲のミシン目）・裏糊などの一致が確認できればOKとなるが、使用済の場合、捺された消印によっては評価が数万倍にもなるだけに、消印の真偽についても様々な検討を要する。だから「切手は本物、ただし消印は偽物」という結論も当然あり得る。

さらに厄介なのは、切手が貼られ消印が捺されたままの郵便物そのもの、つまり配達されて中身（手紙）を取り出しただけの封筒や葉書を、丸ごと鑑定する場合だ。20年ほど前から世界的傾向として、郵便物を集めて、国や地域の郵便の歴史を読み解こうという「郵便史コレクション」が流行し、それに伴う封筒や葉書の評価上昇もあって、「郵便物全体として本物か」を問う鑑定のニーズは高い。封筒から剥がしてしまえばただの使用済切手に過ぎないが、時代や環境に応じて郵便料金やサービスには多様な変化が生ずるので、丸ごとの郵便物からは、切手単独の場合よりも遥かに多くの情報（いつ、どこから、どこ宛てに差し出され、どこを経由して、いくら料金の、何日かかって相手に届いたのか）が分かり、当時の状況を知る貴重な史料となる。平和な時代には郵便は粛々と配達されるが、戦時下では検閲や捕虜郵便、空襲による差し戻し便といった例もある。だから、郵便物をたくさん集めて整理すれば、その国の郵便サービスの「一大絵巻」を作るのも困難ではない。

実は私が中学時代から熱中している1つがこのスタイルのコレクションだ。明治初期に日本が文明開化で近代郵便制度を導入して以降、近年に至るまで



池田 健三郎 (いけだ・けんざぶろう)

1968年10月、神奈川県横須賀市生まれ。

1992年日本銀行入行、一貫して金融経済の第一線で研鑽を積む。その後個人事務所(シンクタンク)を設立し、「政策職人」として活動。評論・執筆・講演、プロデュース活動、さらには企業顧問として戦略的経営のアドバイザリー・サービスの供与など多面的活動を展開。

NPO法人日本郵便文化振興機構の代表理事(兼)使用済切手慈善運動本部長として、使用済切手の回収を通じたボランティア団体・非営利組織の助成にも力を注いでいる。JCI(国際青年会議所)セネター。



「権力奪取」(監訳) 日本評論社

の「速く運ぶ郵便サービス」(明治初期は「別配達」などと呼ばれ明治44年「速達」となり今日に至る)の実例を年ごとに洩れなく集めようと挑戦中である。すでにこの収集と研究を始めて25年。現在、登山という9合目くらいで殆どの年の郵便物は収集済だが、頂上をきわめるのは生涯無理だろう。

少し前のことになるが、三谷幸喜さんの映画「笑の大学」の制作中、「昭和15年当時の召集令状を主人公が受け取る重要な場面があり、その令状のリアルなレプリカを作りたい」と相談を受けたことがある。さっそく私のコレクションにある同時代の召集令状(速達書留郵便)ご覧にいれ、当時売られていた本物の切手も提供したところ、美術スタッフが本物と見まがうばかりの「召集令状」を完成させた。これがスクリーンに映し出されたときには、一瞬のこととはいえ何ともいえない感慨があった。

ところで最近、先述のように切手がプチ・ブレイクする一方で、肝心の日本切手のプレゼンスが当局(現在は国営の郵便事業株式会社)の経営状況を反映

して低下しているのは残念で、経済評論を生業とする者としても気懸かりだ。従来、切手は郵便料金の支払い手段として幅広く使用可能だったが、昨秋以降、まとめて郵便物を出す際の料金別納には使えなくなってしまう。郵便を出す度に、いちいち現金決済を迫られるのなら、何のために郵便会社の負債になる「前払い証票」である切手をかくも沢山発行するのか理解に苦しむ。

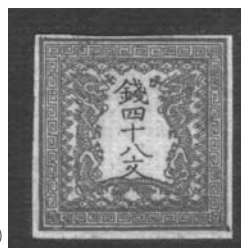
明治以来一貫して切手は、広義の「有価証券」として国の信用を背景に発行され流通してきた。それを本来の郵便に使いつらくしてその市場価値が額面を割り込むという事態は、国への信認を損なうもので、国際的にも恥ずかしい。事実、金券ショップなどでは実用切手の「査定」は低下する一方で、買取拒否すら起こっている。後世になって、この時代の郵便物を読み解くコレクターたちに「この時代は当局のモラルが低かった…」といわれられないような、筋の通った制度の再設計は、東京中央郵便局の局舎保存よりも重要なことではないだろうか。



①



②



③



④

【私のコレクションから】

- ①世界最初の切手「ペニーブラック」(1840年 英国)：大量に印刷されたので現存数は多い
- ②世界最初の三角切手(1853年 英領喜望峰)：英本国内で印刷し現地に運んで使用された
- ③日本最初の切手「竜48文」(1871年)：銅版による凹版印刷
- ④郵便週間記念「月に雁」(1949年)：昔は憧れの切手だったが今は「大人買い」も可能に
- ⑤昭和18年の召集令状(書留速達郵便)：貴重な郵便史料で映画「笑の大学」のモデルになった封筒



⑤